

2016年3月20日に2015年度課題研究発表会&開講式が行われました。

2016年3月20日（日）11：00～日本福祉大学名古屋キャンパス7階において、課題研究発表会&開講式が行われ、教職員と10名の受講生が参加しました。



発表時間15分、質疑応答5分の計20分の持ち時間で、課題（課題意識）の背景や受講前の思いに触れ、各自の現場での問題点の分析、構想中の事業計画やアクションプラン、連携モデルづくり、あるいは、本プログラムへの（分析に基づく）改善提案、受講生のネットワーク化の提案などを、受講の成果として発表していただき、最終的に修了の判断する機会として設定したものです。発表形式は、PPTや資料作成など自由としました。

様々な困難を抱える若者の居場所づくりに関わってきた受講生は、受講を通じて1対1のアプローチだけではなく幅広く地域の課題として解決していく必要性に気づき、他分野の資源と情報共有し協働するための連携やネットワーク化へと考えを進めました。若者自立支援のNPO設立に動き出し、人手不足を抱える企業との仕事づくりに踏み出そうとしています。

社協事務局長である受講生は、まちの課題と福祉の課題が一致してきているものの、従来の福祉の発想ではそれらを解決する柔軟な発想を持ちえないことから、受講に至ったといいます。組織分析をしつつ、受講生の取り組みに刺激を大いに受け、一層自ら動き、生活者の視点を持ちながら新しい仕組みや仕掛けづくりをする決意を述べました。



ひきこもり・不登校支援に関わる受講生は、ファイナンシャルプランナーとして関わるも金銭管理だけでは事済まない現状に触れたことから、受講で学んだ視点を活かし「生きることが可能な環境を一緒に見つけ出す視点にたった支援を地域で創出」するためのアクションプランを、「場」づくりと収益事業の観点から見出して発表しました。



都市部でのまちづくりに長年関わってきた背景を持ちながら、受講を1つの契機として地方の農業実習生として転身した受講生は、課題先進地に学ぶ発想や場の観察などプログラムでの学びを活かして視野を広げ、農業ばかりではない地方の豊かな可能性を一層確信したことで、次なる新たな道を選択しようとしています。

本プログラムは家庭にいる女性の学びの機会にも寄与しようとするものですが、受講期間中に出産した受講生は、手書きのKP

(紙芝居プレゼンテーション) 手法で、「孤立」や「孤育て」を防ぎ地域住民が主体となっ

て課題を解決できる地域づくりに向け、活動を生み出す「語らいの場」や人を集める「交流の場」という仕掛けについて発表しました。

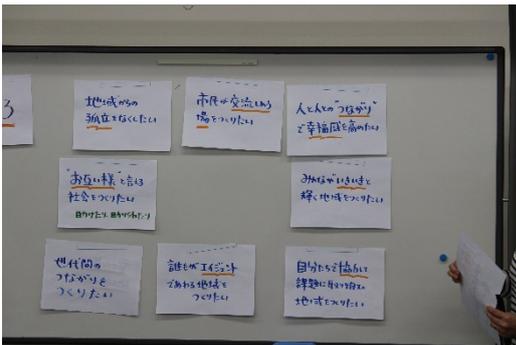
摂食障害を抱える女性の自助グループを運営する受講生は、匿名性のあるゆるやかな「居場

所」「語りの場」が一期一会でありながら安心安全の場として機能していること、自らファシリテーターからマネジャーとなり次に目指すべき新たな展開として、①中間的就労の模索、②自己実現の場、③マイノリティの強味を活かす取り組みについて述べました。

本プログラムのパワーアップ提案をした受講生は、「福祉開発マネジャー」の

目指されるべき像について詳細なメッセージが必要なことや、養成といいながら実は社会経験を有する受講生には「覚醒」が重要であり、そのためにも受講生同士が交じり合う場が求められていること、今後のプラットフォームづくりなどの提言を行いました。

行政の部長職にある受講生からは、自身の取り組みを振り返りながら地域福祉における庁内連携の風土づくりや隣保館事業の捉え直しが語られ、地方創生の流れをチャンスと捉え地域をフィールドに様々な資源が連携することで、ビジネス



の視点も含めながら人づくり・地域づくりを行う、地域福祉アクションプログラムのプランが発表されました。

福祉が支援対象として見てきた人たちも、実は地域の人材であり主体であるという気づきを得て、幅広い「場づくり」を志向する受講生からは、まず対人援助職の事例検討会という横の連携から始めてネットワーク化へとつなげ、地域課題の共有を行うことで個別支援だけではなく地域支援へと広がりを見出すアプローチが述べられました。



OTとして働く受講生からは、高齢者の在宅復帰への関心から自身の出身地域の課題に関心が向かい、高齢者の意識調査結果を見る視点に深まりが増し、既存とニュータウンの地域性の違い、相談の仕組みや集まる場づくりの必要性、今ある活動をサポートするのも大切と考えるようになったこと、いずれ出身地域で何かをしたいことなどが語られました。



当初の課題意識や関心が、受講によって変化したり深まりを増したりしたことに触れる受講生がほとんどでした。質問等においても、受講生同士活発な質問が出され、意見交換やエールにもなっていました。また、教員からの豊かなアドバイスがなされる機会ともなりました。昼休憩時も、昼食を取りながら受講生同

士や教員と賑やかに話の輪が広がっていました。

何よりも、受講生から語られたのは、影響を互いに与え合っていること、自分だけでは狭い視野で壁を感じるところもあったが語り合うことで新たなスタイルが見えてくること、オンラインばかりではなくオフラインで顔を合わせる刺激の大きさなどでした。

受講生募集を行い、定員 15 名を満たして 1 年修了プログラムを本格実施した 2015 年度。講義、演習、フィールドワークだけではなく、受講生同士のつながりを通じて、一人一人の受講生に「福祉開発マネジャー」としての意識の高まりが見られました。修了は決して卒業ではない、ここからが私たちの次のステップの始まりなのだという力強い言葉も聞こえ、第 2 期生ともつながりたいとの要望も出されています。教職員も交えた場所を移しての懇親会でも、大人の学び直しの豊富さの熱い語りで大変盛り上がりしました。

2016 年度もきっと、豊かな出会いと学びが生まれていくことでしょう。